

巻頭言

院長 亀山元信

仙台市立病院医学雑誌第31巻が刊行されることになりました。原著、症例報告、コメディカルレポートなど、院内各部門からの論文17編と2010年に発行された著書・論文リスト、学会発表、院内剖検、救命救急センター症例検討会の内容等の一覧が掲載されています。日常業務が多忙な中で論文を執筆された方々、そして編集作業にあられた編集委員長の長沼先生をはじめ編集委員の先生方の御尽力に深謝申し上げます。

3月11日に発災した東日本大震災で東北地方は甚大な被害を被り多くの人命が犠牲となりました。仙台市においても津波による若林区、宮城野区東側の惨状には言語を絶するものがあります。発災直後から当院は全職員をあげて災害対応体制をとり、病院の総力を結集して災害医療に取り組みました。一方、本館屋上煙突の損傷による崩落の危険性から院内に立ち入り禁止区域の設定を余儀なくされ、その中に手術室、中材、分娩室、中検、薬剤、ボイラー室、さらに北側病棟ナースステーション・病室等が含まれていたため大幅な診療能力の低下と病床数の削減に直面することとなりました。しかし救命救急センターの緊急検査室、放射線診断機器を使用した救急診療は発災直後から一時も休止することはなく、災害拠点病院として一定の役割を果たすことができた幸運をむしろ感謝の思いで振り返っています。

今回の災害における医療活動の問題点は今後様々な機会を通じて検証されなければなりません。立ち止まって考えてみれば「災害医療」は極めて特殊な医療ではなく、日常医療活動の延長上に位置するものの筈です。しかし、日々の医療中で、「聞いたこともなく」、「見たこともなく」、まして「考えたこともない」医療行為・活動を即時に行うことは不可能であり、また肯定すべきことでもありません。このギャップを埋めるのが「教育」、「研修・訓練」を通じた「情報と体験の共有化」なのだろうと思っています。

日々の多忙な業務の中で感じた問題点や興味深い症例について「検証」し、学会発表を行い論文にまとめることによって「情報の共有化」を図り、批判を受けることによってさらに内容を充実させるというプロセスが、個人の資質の向上につながるのみならず、医療の進歩につながると確信しています。本医学雑誌の益々の発展を心より願っています。